島本町文化財調査報告書

第 15 集

広瀬遺跡調査概要報告

平成22年 3 月

島本町教育委員会

序　　文

島本町では、先人たちが大切に遺してきた数多くの文化財の存在が周知されています。これらの文化財を守り、後世に正しく伝えることは、現代を生きる我々の責務であります。本町では、平成20年７月に島本町文化財保護条例を施行し、埋蔵文化財について包蔵地の周知と保護を行うとともに、未だ遺跡の確認されていない地域での調査も実施し、新たな埋蔵文化財の発見に努めております。

ここに刊行します報告書は、宅地開発に伴う埋蔵文化財包蔵地内発掘調査として平成21年９月に実施した広瀬遺跡発掘調査の成果を報告するものです。

最後になりましたが、調査にあたりまして、多大なご指導、ご協力を賜りました関係諸機関の皆様、また発掘調査にご理解、ご協力いただきました土地所有者の方や近隣の皆様方には紙面をおかりして、深く感謝しお礼を申し上げますとともに、本町の文化財保護行政に対し、今後ともご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成22年３月

島本町教育委員会

教育長　森 川 正 啓

例　　言

1．本書は、平成21年宅地開発に伴う緊急調査として、大阪府教育委員会事務局文化財保護課の指導のもと、島本町教育委員会が実施した広瀬遺跡調査報告書である。
2．調査は、島本町教育委員会事務局生涯学習課嘱託職員久保直子を担当者とし、平成21年９月10日に着手し、島本町立歴史文化資料館整理室で引き続き整理調査及び報告書作成業務を実施し、平成22年３月31日に本書の刊行を以って完了した。
3．調査及び整理作業にあたっては、下記の調査員及び調査補助員の参加を得た。(順不同)
　【調　査　員】　　坂根　瞬
　【調査補助員】　　上野　政彦　上野　恵巳
4．本書の執筆は久保が行い、作成・編集は久保、坂根、上野(恵)が行なった。
5．本調査に関わる資料の保管と活用及び本調査によって作成された資料などの管理は、島本町教育委員会がこれにあたる。
6．現地作業及び整理作業においては、関係機関ならびに方々には貴重なご指導ご教示を賜った。記してここに感謝の意を表します。

凡　　例

1．本書に用いた標高は、東京湾平均海水面（T．P．〔Tokyo Peil〕）を基準とした数値である。方位は、国土座標第Ⅵ系における座標北である。
2．土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀夫編『新版標準土色帖』第12版を使用した。
3．遺構記号については、以下の通りである。
　Ｐ：ピット　　ＳＤ：溝　　ＳＸ：性格不明遺構

挿図目次

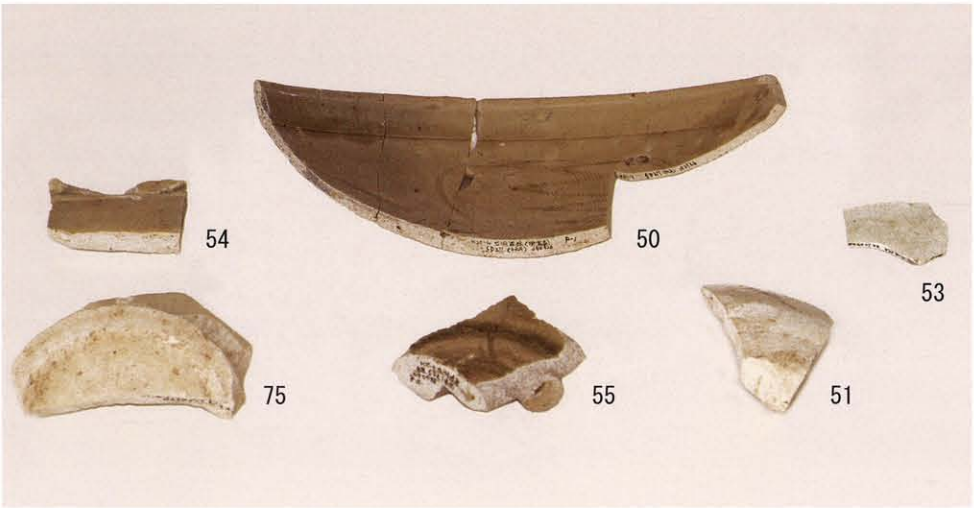
第１図　島本町内遺跡分布図（１／15,000）
第２図　調査地位置図（１／2,500）
第３図　第１遺構面平面図（１／80）
第４図　第３遺構面平面図･断面図（１／80）
第５図　ＳＸ25出土遺物実測図（１／４）
第６図　ＳＤ27出土遺物実測図（１／４）
第７図　緑釉土器実測図（１／２）
第８図　ＳＸ26出土遺物実測図（１／４）
第９図　包含層出土遺物実測図（１／３・１／４）
第10図　瓦実測図（１／３）

図版目次

図版１　出土遺物写真
図版２　第１遺構面全景（西から）
図版３　第３遺構面全景（西から）
図版４　ＳＤ27土器出土状況（南から）
図版５　ＳＸ25土器出土状況（南から）

付表　出土遺物観察表

20
21
22
23
24
26
27
25
42
28
18
15
19
76
10
8
65
7
35
1
3
6
4
14
32
5
59
66
68
47
46
63
37
36
13
91
90
88
89
48
84
64
40
86
87


54
50
53
75
55
51

57
56

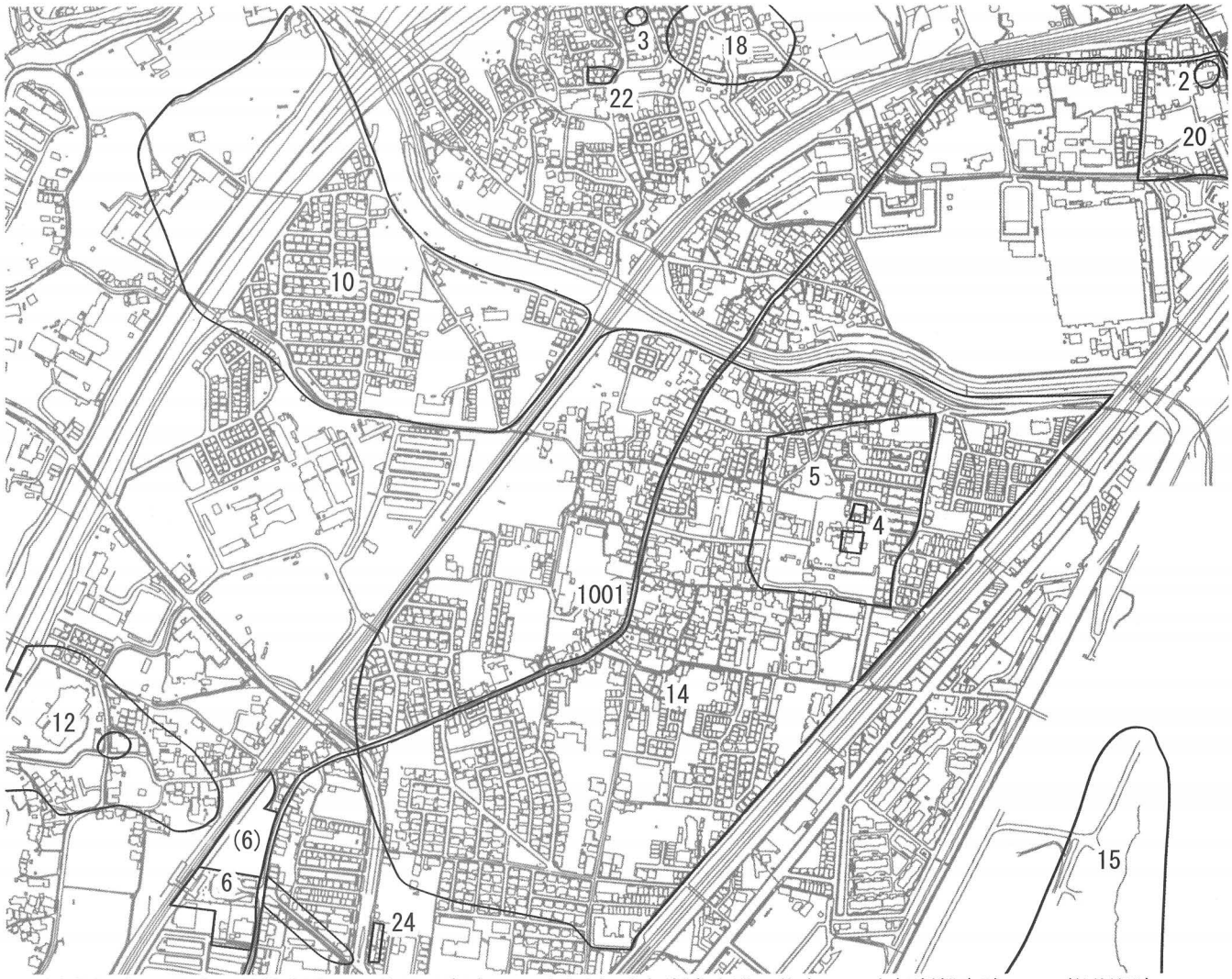
図版１　出土遺物写真

第　1　章

島本町の地理的・歴史的概要

島本町は、大阪府の北東端、京都府との境に位置する。町域の東南部で、木津川、宇治川、桂川の三川が合流し淀川に流れ、また、町の中心を西国街道が貫き、水陸の両方の交通の要衝として古代より栄えてきた。自然環境の面でも「大沢のスギ」「尺代のヤマモモ」「若山神社のツブラジイ林」が大阪府の天然記念物に指定されており、豊かな自然が残されている土地でもある。水無瀬神宮の「離宮の水」は後鳥羽上皇が造営した水無瀬離宮にちなんで名付けられたと言われており、昭和60年７月に大阪府下で唯一、環境庁認定の「名水百選」に選ばれている。

島本町の始まりはサヌカイト製の国府型ナイフ形石器とチャート製の剥片数点が採集されていることから旧石器時代にさかのぼる。町の西側では、縄文時代後期に相当する鉢・甕や、弥生時代の土器も出土していることから、狩猟・採集の時代から集団で稲作を始める頃へと、人々の生



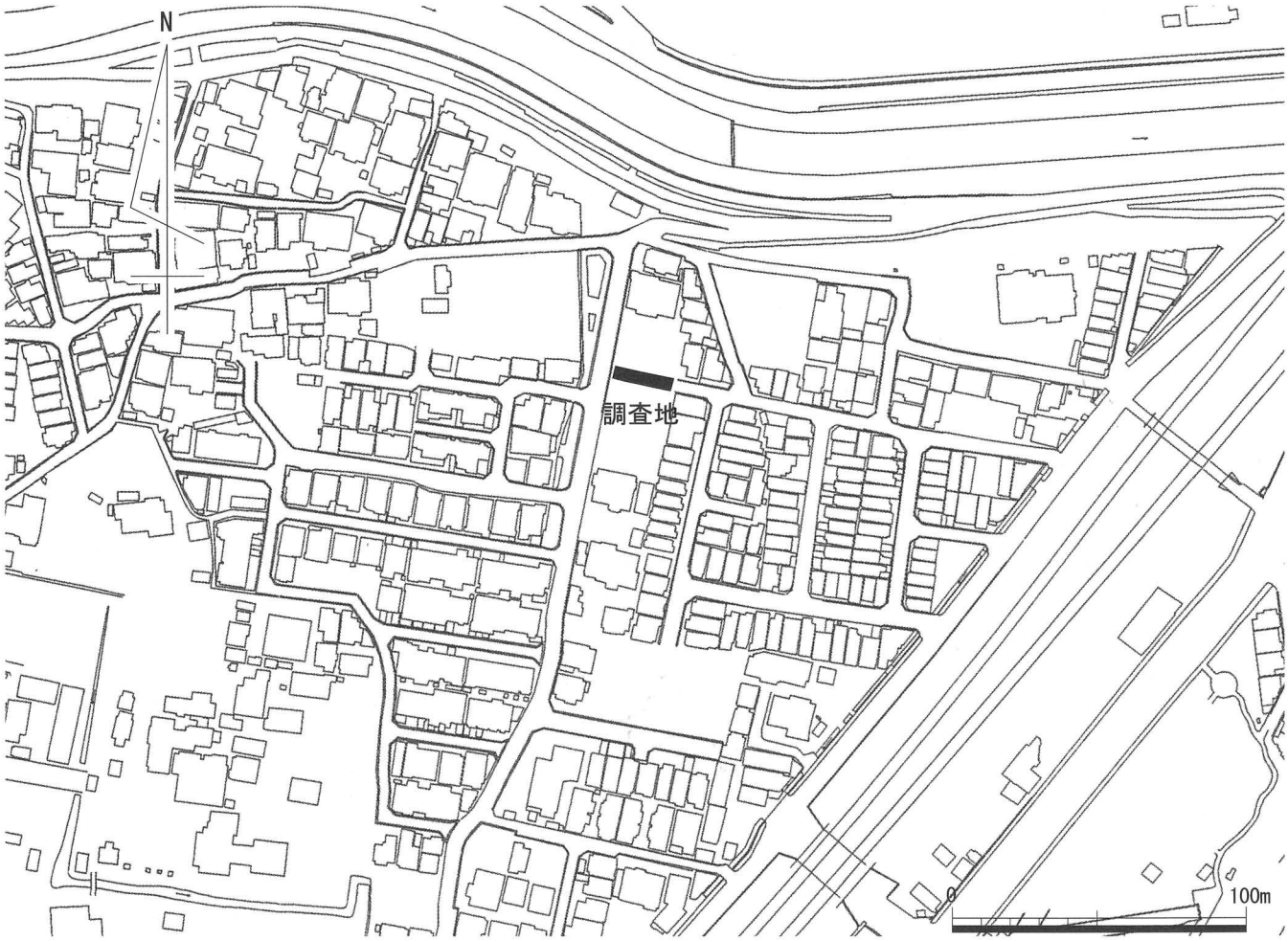
2.〔府指〕有文 関大明神社本殿　3. 鈴谷瓦窯跡　4.〔重文〕水無瀬宮客殿・茶室　5. 水無瀬離宮跡　6. 桜井駅跡
(6).〔史〕桜井駅跡（楠木正成伝承地）　10. 水無瀬荘跡　12. 桜井遺跡　14. 広瀬遺跡　15. 広瀬南遺跡　18. 山崎西遺跡
20. 山崎東遺跡　22. 御所ノ平遺跡　24. 広瀬溝田遺跡　1001. 西国街道

第１図　島本町内遺跡分布図（１／15,000）

活が途切れることなく営まれたことが想像される。ＪＲ島本駅周辺においても近年、弥生時代中期から後期にかけての土器が出土しており、広い範囲で古代から生活が営まれたと考えられる。名神高速道路建設時には、古墳時代の土器や鉄器が採集され、付近に古墳や古墳時代の集落があったことを示している。

奈良時代になると、奈良の東大寺に瓦を供給したのではないかとされる鈴谷瓦窯が造られた。この地の南側では、竈付の住居跡が検出されている。また、西国街道を中心に広がる広瀬遺跡でも集落跡の存在が確認されており、広範囲にわたって、生活の場が存在したと考えられる。また、水無瀬川の西岸部には、日本最古の絵図「摂津国水無瀬荘図」に描かれる奈良東大寺領の荘園「水無瀬荘」が造営された。

その後、平城京から長岡京、平安京へと遷都されていくにつれ、島本町は水・陸の交通上重要な位置を占めるようになった。『延喜式』にある山崎駅の記述や『土佐日記』『更級日記』などには、山崎津の賑わう様子が記載されている。平安時代以降には桓武天皇や嵯峨天皇が頻繁に訪れ、中でも後鳥羽上皇は、鎌倉時代のはじめに水無瀬離宮を造営し遊興の時を過ごした。また、延元元年（1336）足利尊氏の大軍を迎え撃つため京都を発った楠木正成がここで長子の正行に遺



第２図　調査地位置図（１／2,500）

訓を残して河内へと引き返らせた「楠公父子別れの地」として広く世に知られている国指定史跡桜井駅跡がある。この場所は、奈良時代に京から西国に向かう道筋に設置された駅（うまや）の一つを指すものとも考えられている。

第　2　章

広　瀬　遺　跡

調査期間：平成21年９月10日（木）から９月26日（土）

調 査 地：大阪府三島郡島本町広瀬二丁目　地内

調査面積：約80㎡

１．調査の概要

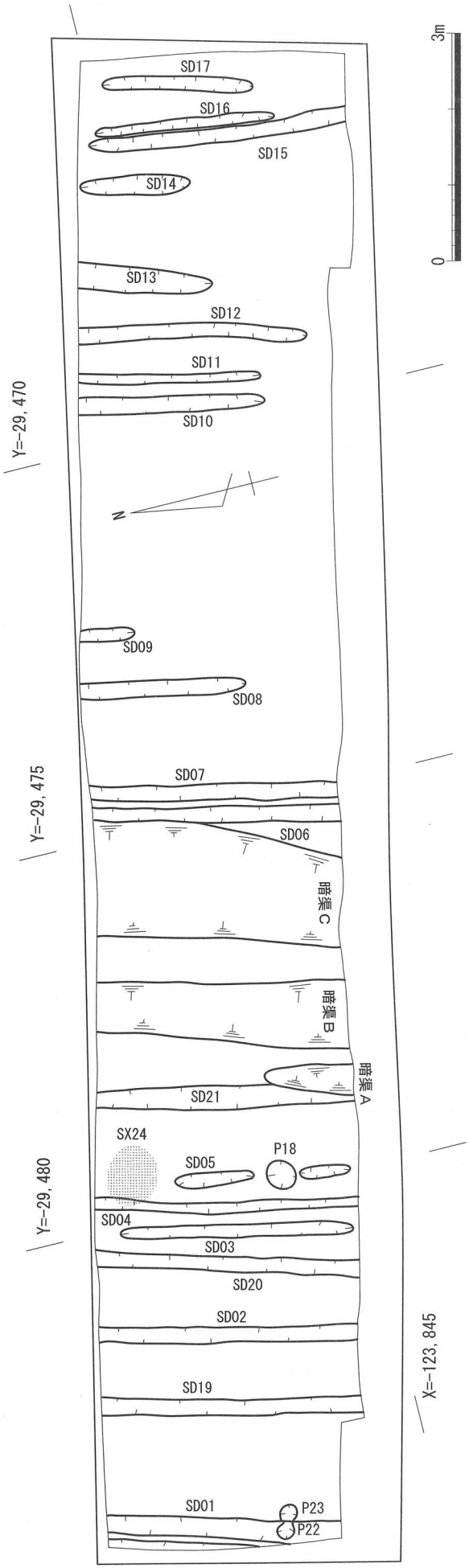
本調査事業は、平成21年度に行なった民間業者による宅地開発に伴う緊急発掘調査である。今回調査の対象となった広瀬二丁目は島本町内で周知される埋蔵文化財包蔵地の広瀬遺跡内にあり、調査地の北側に水無瀬川、東側には淀川が流れるところに位置する。また、南西部約100mには水無瀬神宮があり、水無瀬離宮跡遺跡に隣接している。広瀬遺跡は古代から近世期にわたる複合遺跡で範囲も広く広瀬地区全域に及ぶ。昭和63年に行なった島本町立第一小学校の施設整備に伴う発掘調査では、奈良時代から平安時代にかけての時期と思われる建物跡や土器の掘り穴、溝などが検出され、東大寺水無瀬荘園の荘民の集落である可能性が高いと考えられた。

調査地の周囲は住宅に囲まれており、近年は家の建て替えが多く、新旧の入れ替えが進む地域でもあった。そんな中で、水田として現在まで利用されていた一画であった。周辺での住宅建て替え時の立会い調査では、深さ約－1.0m前後で遺構面が確認されており、今回の調査でも重要な遺構が残る可能性が高いと考えられた。

調査範囲は開発予定面積約1,084㎡のうち道路部分約80㎡を対象とし、個人専用道路となる部分については立会い調査を実施する計画とした。

２．基本層序

調査地での基本の層序は、（１）耕作土（２・３）床土の下層に（４）黄褐色砂質土があり、マンガンが多く含まれていた。この層では南北方向の近世の鋤溝が多数検出され、また、調査地中ほどでは３本の落ち込みが確認された。この落ち込みについては、後世に水田を行なう時の排水のための暗渠と考えられた。ここを第１遺構面とし、近世期のものと考える。次に（５・６）は明褐色を呈し非常に似た層であるが、その下層（７）は若干灰色を含み（８）の褐色の粘砂土が続く。ここでは、多数の柱穴や、性格不明の南北方向の溝状のものを西側で検出し、出土した



第３図　第１遺構面平面図（１／80）

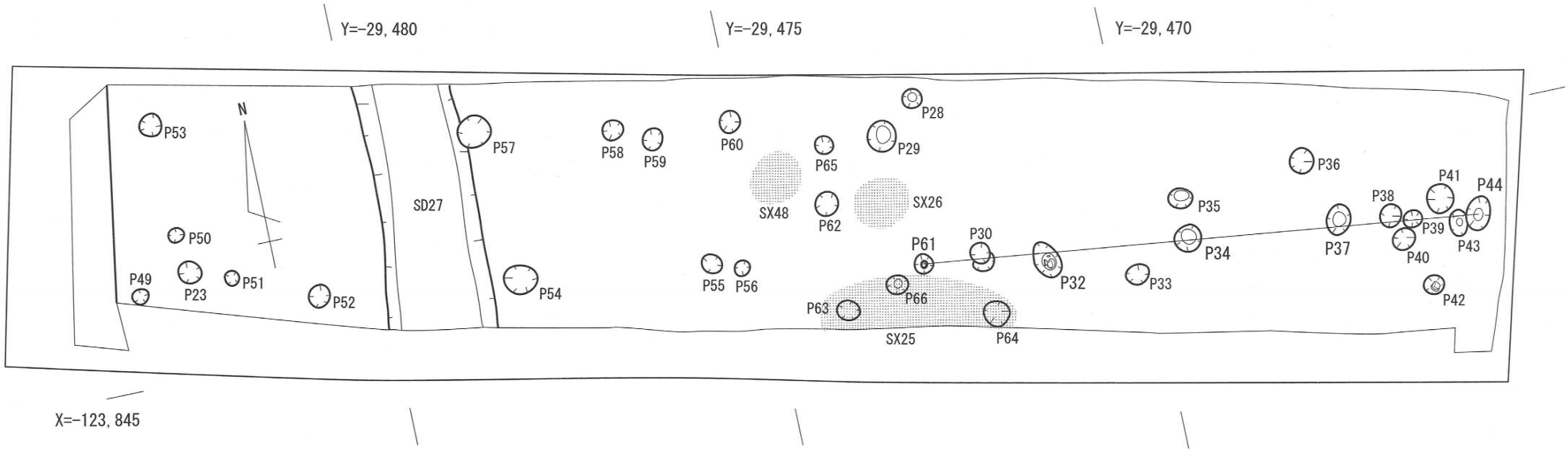
土器に室町時代頃のものを若干含むことから、鎌倉時代から室町時代にかけての遺構面と考え、第２遺構面とした。この層の堆積は薄い。この層より下層の（18）には黄褐色シルト層が広がり、ここからは、南北方向に走る溝や柱穴、土坑が多数検出された。今回の調査で出土した土器の大半はこの面から出土したもので、平安時代末期から鎌倉時代前期にかけての土器類が中心であった。この層を第３遺構面とした。

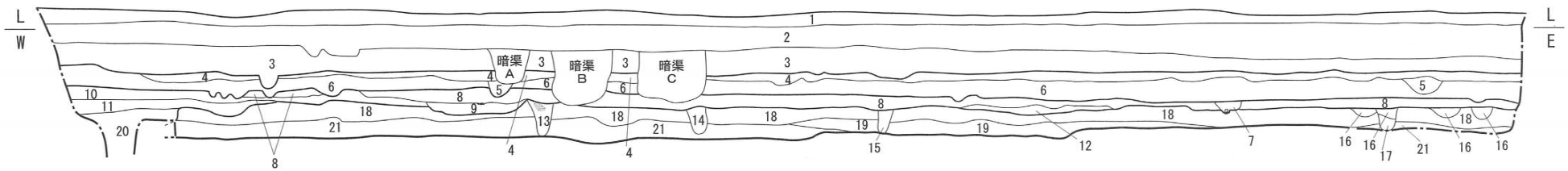
３．検出遺構

今回の調査では、第３遺構面とした鎌倉時代と考えられる面で多くの柱穴や南北方向の溝、土器溜まりを検出することができた。

以下にその主な遺構について概要を示す。

図版２　第１遺構面全景（西から）





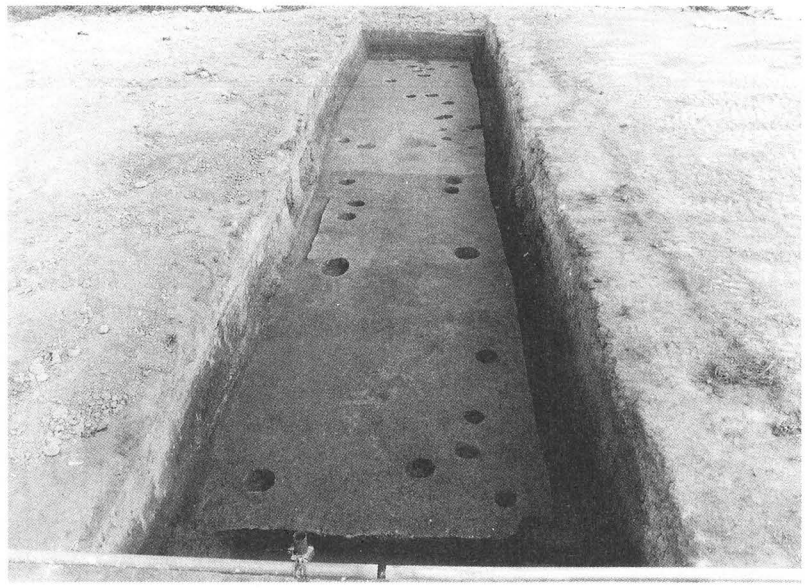
1. 耕作土
2. 床土
3. 旧床土
4. Hue2.5Y5/6 黄褐色砂質土小礫混りマンガン多含
5. Hue2.5Y6/6 明黄褐色砂質土
6. Hue2.5Y5/8 明黄褐色砂質土小礫混りマンガン多含
7. Hue10YR4/2 灰黄褐色細砂土
8. Hue10YR4/4 褐色粘砂土
9. Hue2.5Y4/6 オリーブ褐色細砂土
10. Hue10YR4/4 褐色粘砂土
11. Hue2.5Y5/6 黄褐色細砂土
12. Hue2.5Y6/4 にぶい黄色砂質土
13. Hue7.5YR3/4 褐色細砂土小礫混り
14. Hue2.5Y4/6 オリーブ褐色砂質土礫混り
15. Hue2.5Y5/4 黄褐色細砂土礫混り
16. Hue2.5Y5/6 黄褐色細砂土
17. Hue2.5Y6/2 灰黄色粘砂土
18. Hue10YR5/6 黄褐色細砂シルト層
19. Hue10YR5/4 にぶい黄褐色粘砂土
20. Hue10YR4/3 にぶい黄褐色シルト層
21. Hue10YR4/4 褐色細砂粘土混り

0 3m

第４図　第３遺構面平面図・断面図（１／80）

ＳＸ25（第４図）

第３遺構面で検出した土器溜まりで、鎌倉時代前期の土師器皿や瓦器椀の完形品が多く出土している。土坑の明確な掘り方は不明であるが、広い範囲で土器が投棄されたものと考えられる。



図版３　第３遺構面全景（西から）

ＳＸ26（第４図）

ＳＸ25の北側で検出した。この土坑もＳＸ25と同様、土師器皿・瓦器椀が多く出土しており、時期もほぼ同じである。

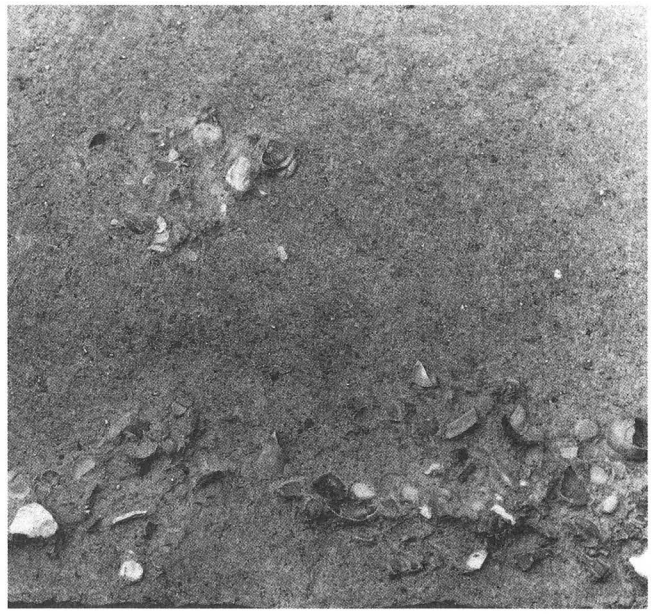
ＳＤ27（第４図）

調査区の西側で検出した南北方向に続く幅約0.8mの溝である。東西の長さは調査面積が限られているため確認できなかったが、少なくとも約４ｍ以上は続いていると考えられた。ここからはＳＸ25・26と同様、鎌倉時代前期の土師器皿、瓦器椀、青磁・白磁などが多数出土している。

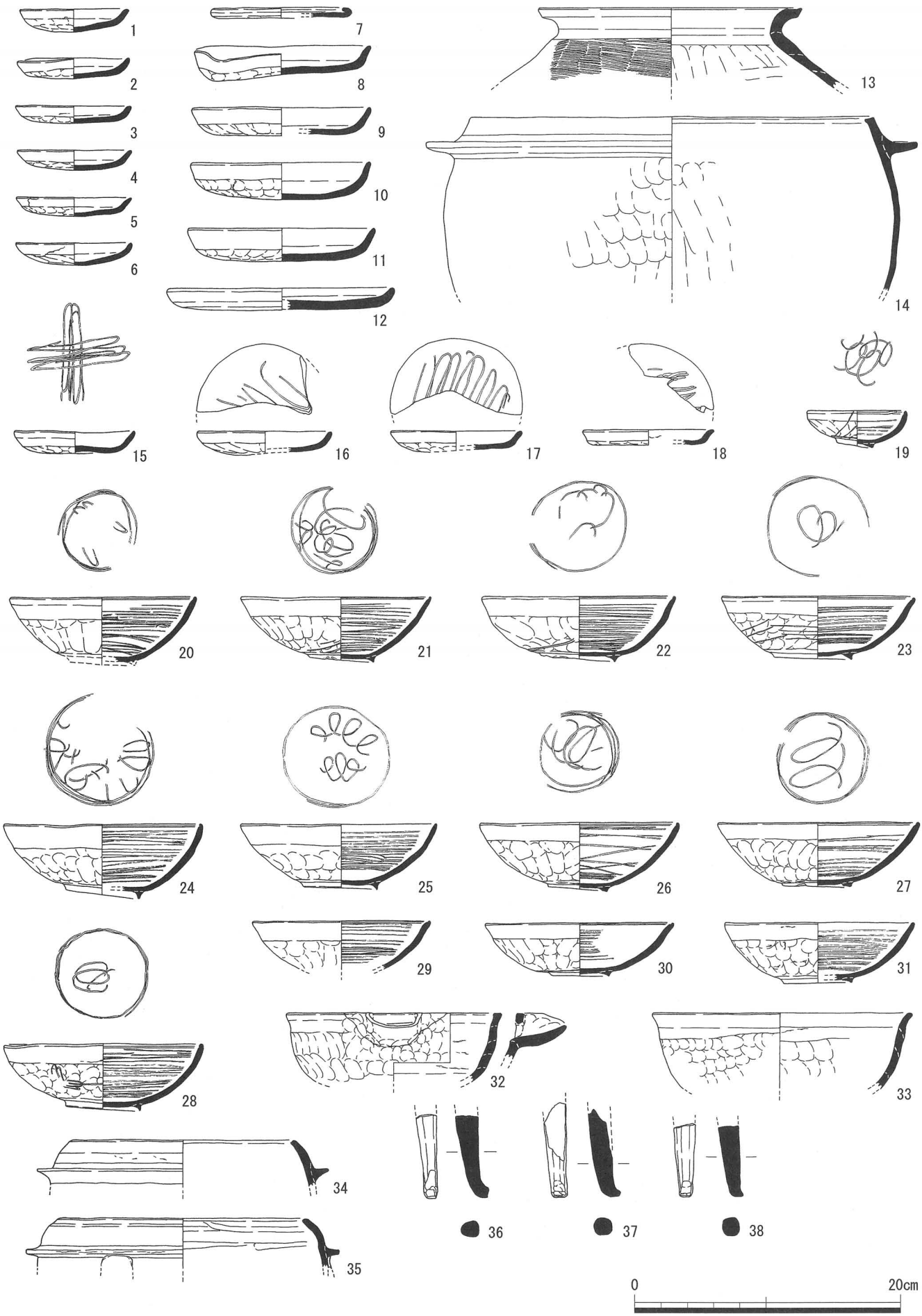
ＳＸ48（第４図）

ＳＸ26の北側で検出した。この土坑も同様土師器皿・瓦器椀が多く出土していて、時期同じと考えられる。ＳＸ25・26・48は、出土した土器の種類・時期や出土状況などが非常に似ていることから、同時期に多量の土器がこの場所に投棄された可能性がある。特にＳＸ25とは、同一固体

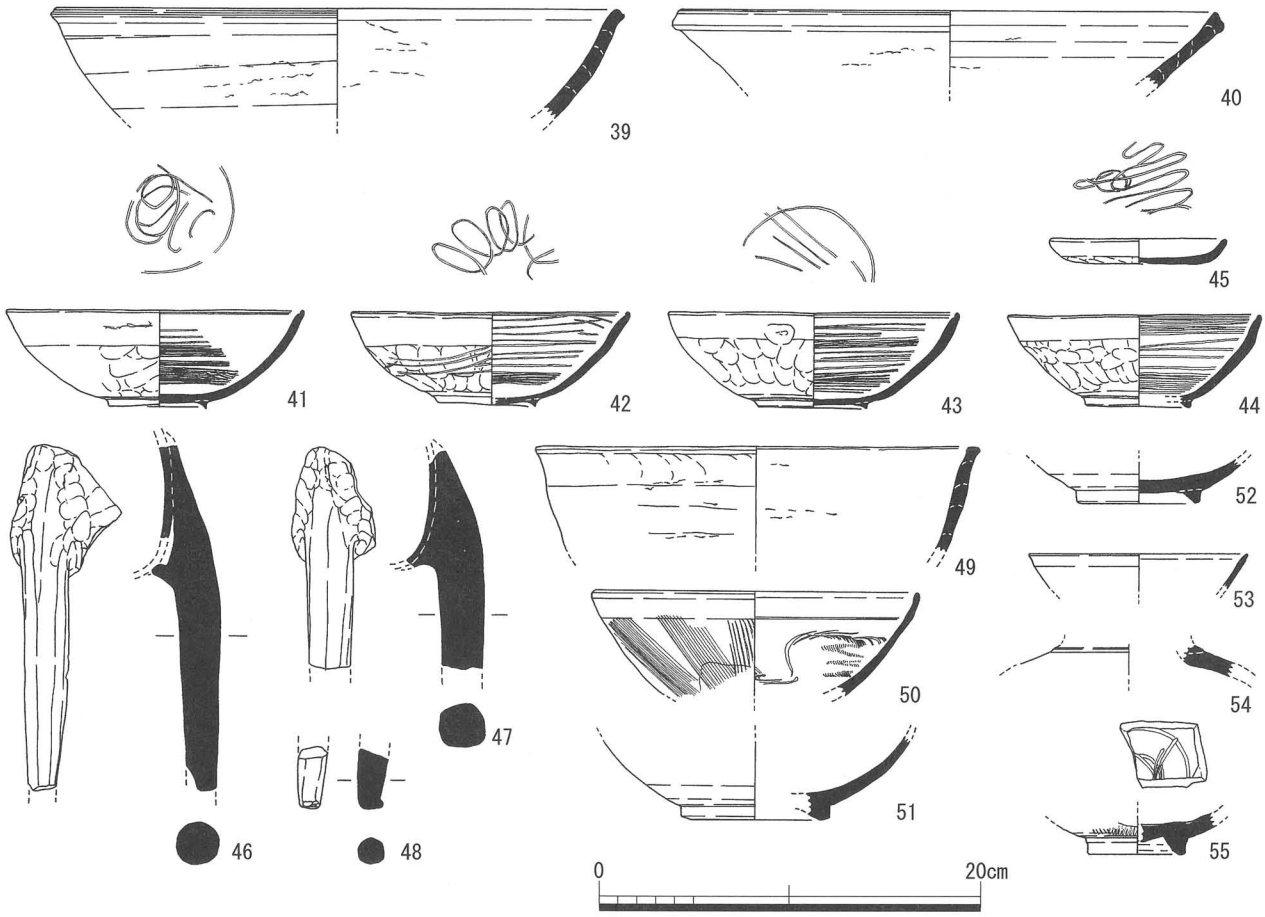
図版４　ＳＤ27土器出土状況（南から）



図版５　ＳＸ25土器出土状況（南から）



第５図　ＳＸ25出土遺物実測図（１／４）

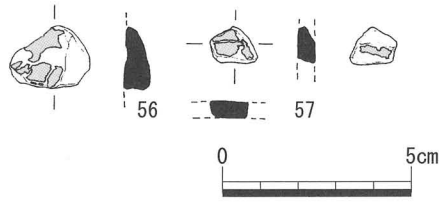


第６図　ＳＤ27出土遺物実測図（１／４）

の破片が混ざっているため、同じ遺構とも考えられる。

Ｐ32・Ｐ34・Ｐ37・Ｐ44・Ｐ61（第４図）

柱間約1.8mの東西に延びる建物跡と考えられる。しかし、南北方向への関連する柱穴は検出できなかったため、あるいは、建物の塀である可能性も考えられる。

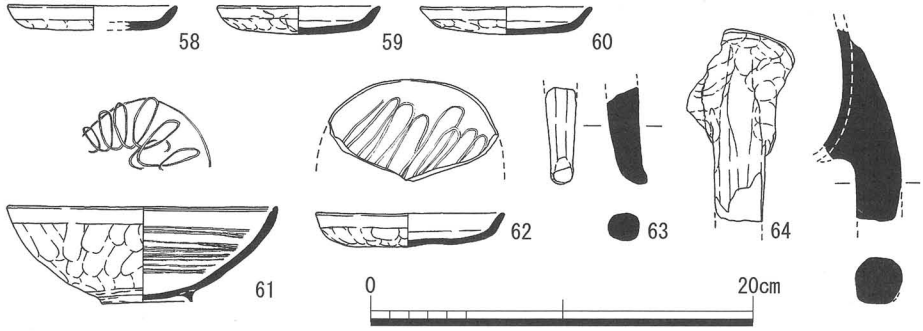


第７図　緑釉土器実測図（１／２）

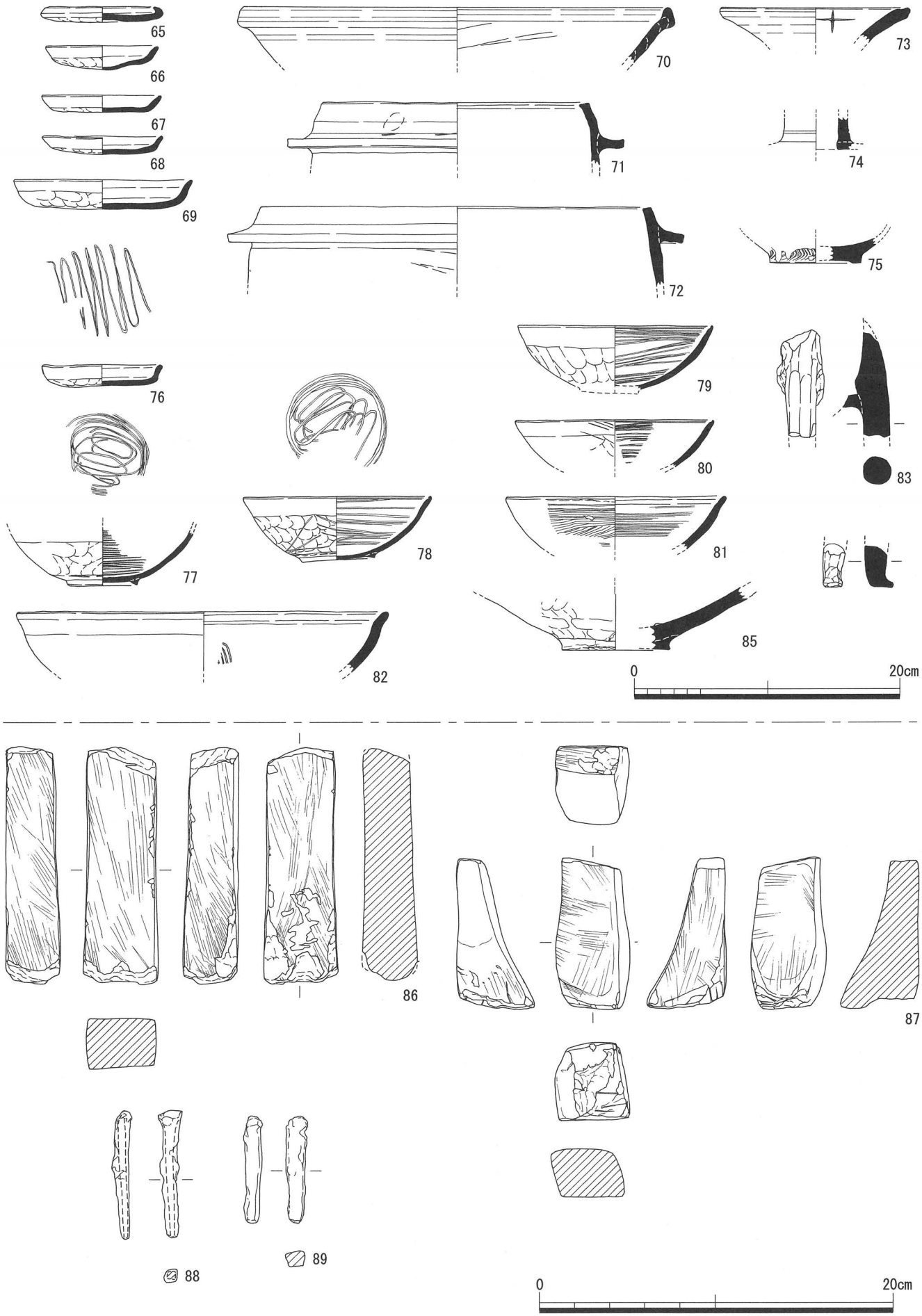
その他、多数の柱穴を検出したが、建物としては確認できなかった。

４．出土土器

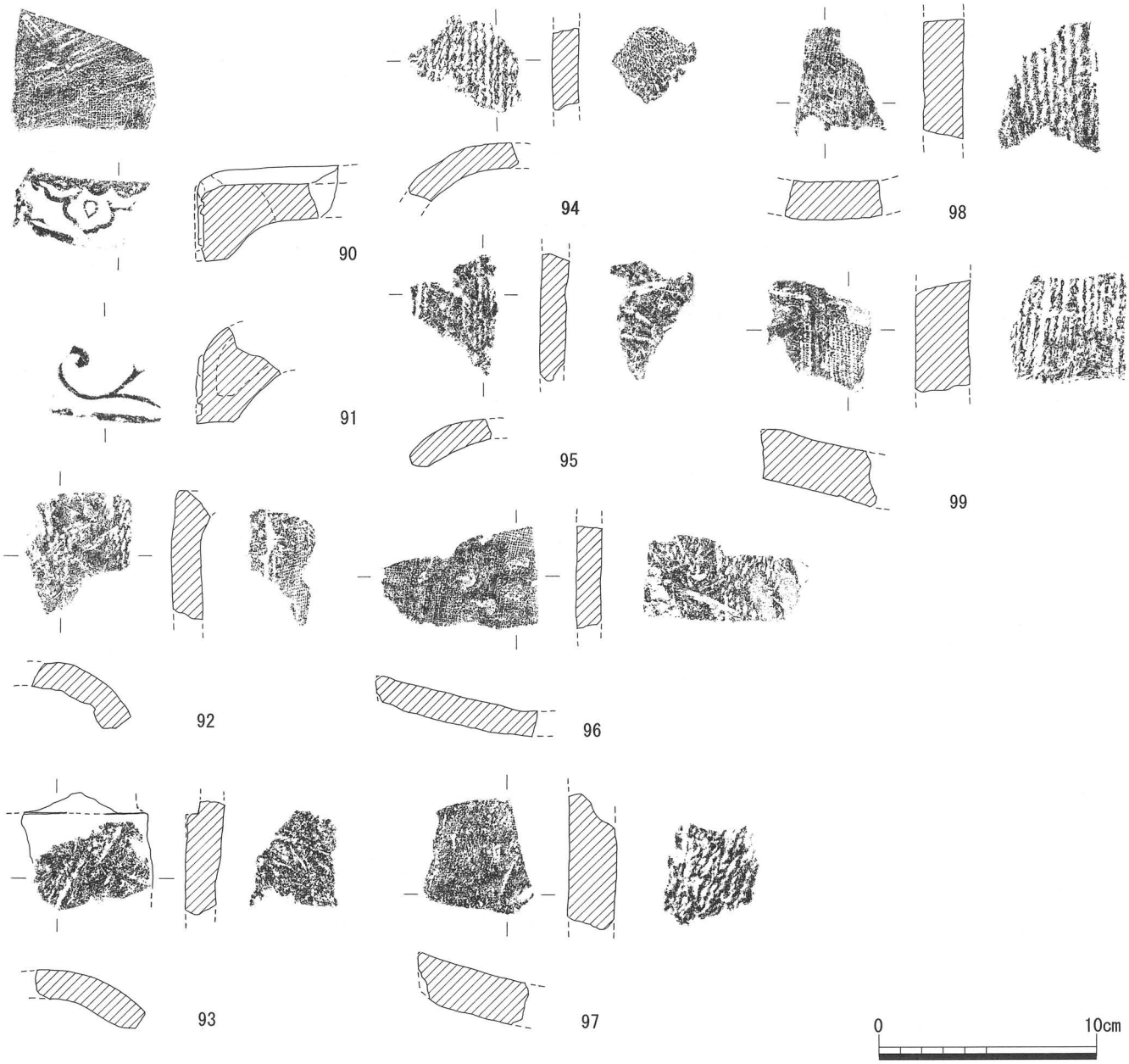
今回の調査で出土した土器は、土師器皿、瓦器椀を主とする土器、陶磁器類および、鎌倉時代初頭に限定できる瓦器類を中心とする遺物が大量に出土し



第８図　ＳＸ26出土遺物実測図（１／４）



第９図　包含層出土遺物実測図（１／３・１／４）



第10図　瓦実測図（１／３）

ている。他に、焼け壁土、鉄釘や使用痕のある砥石類など遺跡を理解するうえで重要と思われる遺物が含まれている。

土器・陶磁器類では、平安時代中期の緑釉陶器、土師器皿、平安時代後期の輸入白磁の壷なども少数みられるが、12世紀後期末から13世紀前様頃に比定できる土師器皿、瓦器椀、羽釜、東播磨系の鉢、甕、焼きしめ陶器の常滑産甕、壷、中国からの輸入陶磁器、白磁の椀・皿、青磁の椀・壷などが量的にも主体をなしている。出土量の減少傾向はみられるが、14世紀初頭に比定できる瓦器、焼きしめ陶器類なども一定量の出土がみられる。

以下では、実測図や写真を掲載したものについて概説する。

ＳＸ25出土土器（第５図）

主に鎌倉時代前半期の土器類である。（１）から（12）は土師器皿である。（１）から（６）は

当地域の特色を持つ土師器小皿で、（８）から（11）は、同タイプの大である。（７）はコースタ型の受け皿で、(12) は口縁部の形態がやや異なるが、同様に受け皿的な用途を考えておきたい。（７・12）に若干問題を残すが楠葉産である。(14) から (38) は瓦器あるいは瓦質土器である。(15) から (18) は瓦器皿、(19) は瓦器小椀、(20) から (31) は瓦器椀である。瓦器椀は、体部外面にヘラミガキが認められる。(23) 等は極少数であり、外面のヘラミガキが消失しているものが多数を占め、内面のヘラミガキ、暗文は粗略化されたものが中心的である。(14) (34) から (38) は瓦質土器の３足付羽釜であり、口縁部が内傾する古相を示すものが主体である。(32) は瓦質の取手付片口鍋である。(33) は小ぶりの瓦質鍋である。瓦器の食器類、瓦質の煮炊具ともに楠葉産を中心としている。(13) は東播磨産の須恵器甕であり瓦質的な焼成となっている。

ＳＤ27出土土器（第６図）

平安時代後期から鎌倉時代前半代に比定できるものである。(39) は須恵器鉢 (52) はいわゆる山茶碗であり、両者ともに東海系である。(40) も須恵器鉢であるが東播磨産である。(45) は瓦器皿 (44) は瓦器椀、(46) から (48) は瓦質土器羽釜の脚、(49) は瓦質土器の鍋である。これらの瓦器類の型式的特長はＳＸ25などから出土するものに共通しており、鎌倉時代前半期に比定しておく。(50) (51) (53) から (55) は中国からの輸入青磁・白磁である。(50) (55) は同安窯系の青磁椀、(51) (53) は白磁椀、(54) は白磁壷であり華南産である。また、第７図に示す (56・57) は緑釉土器の破片で、平安時代後期の椀と考える。

ＳＸ26出土土器（第８図）

(58) から (64) は鎌倉時代前半期に比定できる土師器皿、瓦器椀・皿、瓦質土器である。

包含層出土遺物（第９図）

第２・３遺構面で検出したピットや土坑より出土した土器をまとめた。

(65) から (69) は土師器皿であり、(65) はコースタ型の皿である。(66) から (68) は皿小、(69) は皿大で、当地域に通有なものである。(70) は須恵器鉢、(73) は須恵器甕で口縁内面には「十」のヘラガキによる窯記号が認められ、両者ともに東播磨産である。(71) (72) は瓦質羽釜である。(74) は須恵器の長頸壷の頸部片であり、奈良時代からの混入品である。(75) は中国華南産白磁椀で、外面の体部下端から高台外面の露体部分に縦方向の回転ヘラケズリ痕がみえる。(76) は瓦器皿、(77) から (81) は瓦器椀である。これらは、楠葉産を主とする。(82) は瓦質のすり鉢で室町時代に下がる大和産とみておく。(83) (84) は瓦質の羽釜の脚である。(85) は焼きしめ陶器甕の底部であり、内面に降下釉がかぶる常滑産である。この図版で示した遺物の内、(70) 須恵器鉢、(71) (72) の瓦質羽釜は鎌倉時代後半代に、(82) 瓦質のすり鉢は室町時代前半期に下がるものである。これは第２遺構面が室町時代まで時期幅を持っていることを示すものである。これらのほかは鎌倉前半代を中心とするものである。

出土遺物観察表

図No.	写真	遺構名	出土遺物		法量			残存度	備考
			種類	器種	器高(長)	口径(幅)	底径(厚)		
1	○	SX25	土師器	皿	1.7	8.4	—	ほぼ完形	皿小　口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
2		SX25	土師器	皿	1.5	8.6	—	完形	皿小　口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
3	○	SX25	土師器	皿	1.3	8.8	—	完形	皿小　口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
4	○	SX25	土師器	皿	1.5	8.8	—	完形	皿小　口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
5	○	SX25	土師器	皿	1.4	8.8	—	完形	皿小　口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
6	○	SX25	土師器	皿	1.7	9.0	—	ほぼ完形	皿小　口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
7	○	SX25	土師器	皿	0.8	10.6	—	口縁1/8	コースター型の受け皿　口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
8	○	SX25	土師器	皿	2.65	13.6	—	完形	皿大　口縁:ヨコナデ　体部:ユビオサエ
9		SX25	土師器	皿	2.05	13.6	—	1/4	皿大　口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
10	○	SX25 SX48	土師器	皿	2.8	13.6	—	1/2	皿大　口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
11		SX25	土師器	皿	2.5	14.2	—	ほぼ完形	皿大　口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
12		SX25	土師器	皿	1.6	17.2	—	1/8	口縁の立ち上りが低い受け皿状　口縁:ヨコナデ
13	○	SX25 SX48	須恵器	甕	(5.6)	20.0	—	口縁1/4	瓦質的焼成　東播磨産　口縁:ヨコナデ　外面:タタキ
14	○	SX25	瓦器	羽釜	(13.2)	30.4	—	口縁1/5	口縁:ヨコナデ　体部:ユビオサエ
15	○	SX25	瓦器	皿	1.2	9.2	—	ほぼ完形	口縁:ヨコナデ　底部:ユビオサエ
16		SX25	瓦器	皿	(1.8)	10.2	—	3/8	口縁:ヨコナデ　底部:ユビオサエ
17		SX25	瓦器	皿	(1.6)	9.9	—	1/2	口縁:ヨコナデ　底部:ヨコナデ
18		SX25	瓦器	皿	(1.2)	10.0	—	口縁1/4	口縁:ヨコナデ　体部、口縁部に陵を持つ　端部外傾する
19	○	SX25	瓦器	椀	2.8	7.5	2.7	4/5	小型　底部完存　口縁:ヨコナデ　外面:少しヘラミガキが残る
20	○	SX25	瓦器	椀	(4.9)	14.1	—	7/8	高台部欠損　口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
21	○	SX25	瓦器	椀	4.95	14.4	4.9	2/3	口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
22	○	SX25 SX48	瓦器	椀	4.95	14.6	5.6	5/8	高台完存　口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
23	○	SX25 SX49	瓦器	椀	4.85	14.5	5.8	2/3	口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
24	○	SX25	瓦器	椀	5.7	15.0	5.6	7/8	口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
25	○	SX25	瓦器	椀	4.95	14.9	5.7	完形	口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
26	○	SX25 SX48	瓦器	椀	5.2	15.0	4.5	ほぼ完形	口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
27	○	SX25	瓦器	椀	4.9	15.2	5.0	ほぼ完形	口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
28		SX25	瓦器	椀	5.05	15.05	5.7	完形	口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
29		SX25	瓦器	椀	(4.65)	13.6	—	口縁1/4	明赤褐色を呈す　口縁:ヨコナデ　体部:ユビオサエ
30		SX25	瓦器	椀	4.05	14.2	4.4	1/4	高台あり　口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
31		SX25	瓦器	椀	(4.5)	14.3	5.0	口縁5/8	口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
32	○	SX25	瓦質	鍋	(5.2)	16.4	—	口縁1/2	口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ　取手付片口鍋
33		SX25	瓦質	鍋	(5.7)	19.6	—	口縁1/8	口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ　やや小ぶり
34		SX25	瓦質	羽釜	(3.5)	16.6	—	口縁1/8	口縁:ヨコナデ　口縁部内傾する
35	○	SX25	瓦質	羽釜	(3.7)	18.4	—	口縁1/6	口縁部内傾する　脚部貼り付け圧跡残る
36	○	SX25	瓦質	羽釜	(6.3)	(1.6)	(2.5)	脚部のみ	
37	○	SX25	瓦質	羽釜	(7.15)	(1.7)	(1.85)	脚部のみ	
38		SX25	瓦質	羽釜	(5.5)	(1.6)	(1.9)	脚部のみ	
39		SD27	須恵器	鉢	(5.75)	30.0	—	口縁1/20	東海系　口縁、端部:ヨコナデ
40	○	SD27	須恵器	鉢	(5.0)	29.0	—	口縁1/8	東播磨産　口縁、端部:ヨコナデ
41		SD27	瓦器	椀	(5.15)	14.7	5.1	口縁1/12	高台あり　口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
42	○	SD27	瓦器	椀	5.0	14.6	5.1	3/4	口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
43		SD27 西側断割 第3遺構面土器溜り	瓦器	椀	(5.05)	15.2	5.6	口縁1/3	口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
44		SD27	瓦器	椀	(4.9)	13.4	5.0	口縁1/2	口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
45		SD27 南側	瓦器	皿	(1.35)	9.4	—	1/2	口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
46	○	SD27	瓦質	羽釜	(18.2)	(5.8)	(3.7)	脚部のみ	
47	○	SD27	瓦質	羽釜	(11.7)	(4.3)	(2.2)	脚部のみ	
48	○	SD27	瓦質	羽釜	(2.75)	(1.65)	(1.55)	脚部のみ	
49		SD27	瓦質	鍋	(5.5)	23.2	—	口縁1/8	
50	○	SD27南側	輸入陶磁器	椀	(5.4)	17.2	—	口縁3/8	同安窯系　青磁　施釉あり
51	○	SD27南側	輸入陶磁器	椀	(4.4)	—	7.8	高台1/16	白磁　底部、外面ケズリを施す　体部施釉

出土遺物観察表

図No.	写真	遺構名	出土遺物		法量			残存度	備考
			種類	器種	器高(長)	口径(幅)	底径(厚)		
52		SD27南側	国産陶磁器	椀	(2.3)	—	6.6	底部1/3	山茶椀　東海系
53	○	SD27北側	輸入陶磁器	椀	(1.8)	11.6	—	口縁1/12	白磁　施釉あり
54	○	SD27北側	輸入陶磁器	壷	(1.2)		7.9	肩部1/8	青磁　華南産　施釉あり
55	○	SD27南側	輸入陶磁器	椀	(2.15)	—	5.2	高台1/3	同安窯系　青磁　高台部はケズリ
56	○	SD27西側断割 第3遺構面	緑釉	不明	(1.8)	(2.25)	(0.75)	小片	器種は不明
57	○	断割	緑釉	不明	(1.05)	(1.35)	0.5	小片	器種は不明
58		SX26	土師器	皿	(1.3)	8.8	—	1/4	皿小　口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
59	○	SX26	土師器	皿	1.5	8.6	—	完形	皿小　口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
60		SX26	土師器	皿	1.5	9.0	—	3/4	皿小　口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
61		SX26	瓦器	椀	5.1	14.2	4.75	3/8	口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
62		SX26	瓦器	皿	1.8	9.8	—	3/8	口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
63	○	SX26	瓦質	羽釜	(5.1)	(1.6)	(2.1)	脚部のみ	
64	○	SX26	瓦質	羽釜	(10.1)	(5.7)	(4.1)	脚部のみ	
65	○	北(東半分) 第3遺構面下層	土師器	皿	1.15	7.8	—	1/3	コースター型の受け皿　口縁:ヨコナデ
66	○	P54	土師器	皿	1.85	8.4	—	7/8	皿小　口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
67		P54	土師器	皿	1.3	9.0	—	1/2	皿小　口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
68	○	P54	土師器	皿	1.4	9.1	—	完形	皿小　口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
69		P54	土師器	皿	2.25	13.5	—	1/3	皿小　口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
70		第3遺構面 上面掘り下げ	須恵器	鉢	(4.2)	32.8	—	口縁1/12	東播磨産　口縁:ヨコナデ
71		あげ土	瓦質	羽釜	(4.8)	20.0	—	口縁1/4	口縁:ヨコナデ
72		第3遺構面 上面掘り下げ	瓦質	羽釜	(6.0)	29.5	—	口縁1/6	赤色系を呈す　口縁:ヨコナデ
73		第3遺構面 上面掘り下げ	須恵器	甕	(2.65)	14.3	—	口縁1/8	ヘラ記号「十」　東播磨産　口縁:ロクロナデ
74		第3遺構面 上面掘り下げ	須恵器	壷	(2.4)	頸部径 5.2	—	頸部1/4	長頸壷
75	○	第3遺構面 上面掘り下げ	輸入陶磁器	椀	(1.9)	—	7.0	底部1/3	白磁　華南産　高台部ヘラケズリ
76	○	第3遺構面 上面掘り下げ	瓦器	皿	1.7	9.0	5.9	ほぼ完形	口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
77		P57	瓦器	椀	(4.2)	—	5.2	底部のみ	外面:ユビオサエ
78	○	P54	瓦器	椀	4.9	14.2	5.5	5/8	口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
79		P54	瓦器	椀	(4.85)	14.8	—	1/3	口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
80		北(東半分) 第3遺構面下層	瓦器	椀	(3.5)	15.0	—	小片	赤色系を呈する　口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
81		北(西半分) 第3遺構面下層	瓦器	椀	(4.0)	16.7	—	口縁1/4	器壁厚い　口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
82		あげ土	瓦質	鉢	(4.5)	28.0	—	口縁1/20	すり鉢　大和産か？　口縁:ヨコナデ　外面:ユビオサエ
83		P54	瓦質	羽釜	(8.1)	(3.6)	(3.6)	脚部のみ	
84	○	北(東半分) 第3遺構面下層	瓦質	羽釜	(3.3)	(1.7)	(2.15)	脚部のみ	
85		第3遺構面 上面掘り下げ	国産陶磁器	甕	(4.8)	—	8.0	底部1/4	常滑産
86	○	SX25	石製品	砥石	13.35	4.25	3.1		材質:粘板岩
87	○	P32	石製品	砥石	8.5	4.2	4.4		材質:粘板岩
88	○	SD27	金属製品	釘	(7.2)	(1.35)	(1.25)		角釘
89	○	SD27	金属製品	釘	(6.0)	(1.2)	(1.05)		角釘
90	○	SD27	瓦	軒平	(7.5)	(7.0)	(4.4)	瓦頭面のみ	上面に布目　宝相華文
91	○	断面 P69	瓦	軒平	(3.9)	(5.5)	(4.5)	瓦頭面のみ	唐草文
92		第2遺構面精査	瓦	丸	(6.1)	(4.6)	(1.4)		上面:縄目タタキ　下面:布目
93		第2遺構面精査	瓦	丸	(5.2)	(5.1)	(1.4)		上面:縄目タタキ　下面:布目
94		第2遺構面断ち割り	瓦	丸	(4.6)	(5.1)	(1.15)		上面:縄目タタキ　下面:布目
95		第2遺構面精査	瓦	丸	(6.1)	(3.8)	(1.15)		上面:縄目タタキ　下面:布目
96		第2遺構面断ち割り	瓦	平	(5.4)	(7.5)	(1.15)		上面:布目　下面:縄目タタキ
97		第3遺構面 上面掘り下げ	瓦	平	(6.3)	(5.2)	(2.2)		上面:磨滅(縄目残る)　下面:縄目タタキ
98		SD27	瓦	平	(6.4)	(4.9)	(1.9)		上面:布目　下面:縄目タタキ
99		精査	瓦	平	(5.6)	(5.4)	(2.5)		上面:布目　下面:縄目タタキ

土器類以外では、第３遺構面の土坑、ピットから出土した砥石、鉄器類である。(86)（87）は粘板岩系の砥石であり、明瞭な使用痕がみられ、刃物などの仕上げ時に使用したものと思われる。また、(88)（89）は角釘で建物などに使用されたものと思われる。

瓦（第10図）は出土量も少なく、ほとんどが第２遺構面から出土した小片を中心としたものである。第３遺構面から出土している（90）は宝相華文軒平瓦（91）は唐草文軒平瓦で、他の丸瓦、平瓦片を含めて平安時代後期的様相を残すが、鎌倉時代初頭ころに比定してよいと考えられる。

第　3　章

ま　と　め

今回の調査による成果としては、出土した土器や瓦等の出土遺物や、検出された遺構が鎌倉時代前半期のものを主とすることが考えられることなどに加え、本調査地が以前から推定されてきていた水無瀬離宮跡遺跡に隣接していることから、水無瀬離宮に関係する遺構である可能性が高まったと考えられることである。藤原定家の「明月記」によると、水無瀬離宮は、正治元年（1199）ころ、水無瀬川の右岸、淀川との合流点の近くに建立され「皆瀬御所」「広(瀬)御所」などと呼ばれており、この水無瀬離宮への行幸は後鳥羽上皇が最も好んだと思われ、30数回にも及んでいる。上皇は鳥羽離宮で乗船して淀川を下り、そのまま釣殿に着船していたようで、今回の調査地も淀川、水無瀬川が合流する位置に近いことから、水無瀬離宮が造営されていた時期に何らかの利用があったのではないかと考えられる。

今回の調査で出土した土器をみると、平安時代中期から室町時代までと考えられる土器が出土しているが、その大半は鎌倉時代前半期のもので、食器に使用される土師器皿や瓦器椀、瓦質の煮炊土器類が多く出土している。中でも特筆すべきは、輸入陶磁器である青磁・白磁類が出土していることである。白磁については少し古相を見せるが、これ等の高級陶磁器の出土は、この場所が高い地位を持つ者がいたこと、即ち、水無瀬離宮造営と同時期に離宮に関係する人々の利用があった地域であったことを示し得る資料と言える。さらに、出土遺物の中に少量ではあるが、建物の壁の一部や、鉄釘や瓦が混入することは、今回検出された遺構が単なる一般集落ではなく、特殊な施設の一部であったことを裏付けているものと思われ、離宮に関係する遺構である可能性は高いものと考えられるであろう。また、今回検出した遺構の中で、ほぼ真南北方向を示す溝跡や、それに直行する柱穴列（柵列）などは、方位を意識して造営されることが多い役所的な状況を示すと共に、離宮に関連する施設を想像させる。

以上のように、今回の発掘調査は、水無瀬離宮の造営を想像させる資料を得られる調査結果となった。しかし、調査地が狭小であったことや、一回の調査成果だけで遺構の性格を明確にすることは困難であり、今後の周辺地域の調査や広瀬地区全域にわたっての広範な調査に期待したい。

報告書抄録

ふりがな	しまもとちょうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	島本町文化財調査報告書
副書名	広瀬遺跡調査報告
巻次	
シリーズ名	島本町文化財調査報告書
シリーズ番号	第15集
編著者名	久保直子、坂根　瞬、上野政彦、上野恵巳
編集機関	島本町教育委員会事務局　生涯学習課
所在地	〒618-8570　大阪府三島郡島本町桜井二丁目１番１号　TEL. 075-961-5151
発行年月日	平成22年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
遺跡範囲								
ひろせいせき 広瀬遺跡	しまもとちょうひろせ 島本町広瀬 2 二丁目　他	27301	14	34° 53′ 8″	135° 40′ 41″	2009. 9. 10 ～ 2009. 9. 26	80	宅地開発に伴う緊急遺跡範囲確認調査

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
広瀬遺跡	集落	鎌倉時代	柱穴・溝	土師器皿・瓦器椀 瓦・羽釜 石器・輸入磁器	水無瀬離宮に関連

島本町文化財調査報告書

第15集

発　行　島本町教育委員会
〒618-8570　大阪府三島郡島本町桜井二丁目１番１号
TEL 075 - 961 - 5151
発行日　平成22年３月31日
印　刷　三星商事印刷株式会社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町300
TEL 075 - 256 - 0961